

本間先生の講話

伝え合う力

どうして、何を、どのように

―こどもの哲学を参考に―

本間直樹・高橋綾 （大阪大学CSCD）

2010年 5 月25日 西宮市香櫨園小学校

2

こども達の声を
聞くことが何よ
りも楽しみ

こども達の中に
本当の答えがあ
る

私は哲学の研究者として大学で教えているのだけれども、研究者の中でも私は特別変わり者で、かっこも変わっているのですけれども、そんな私を飽きずに4年間も迎え入れて頂きまして、本当にありがたく思っています。簡単に自己紹介させてもらいます。

あのやはりこちらの学校に関わらせて頂いて、こども達の声を聞くということが何よりも楽しみ。私は哲学を学んで来たもので、教育学、教育法はそんなに専門的にわからない。ですから、いつも自己紹介で申し上げていますが、一応私は教育のプロではなく、大学院生には教えていますけれど、子ども達の教育はみなさんがプロであって、私がみなさんに教えてさしあげることはないと思っています。みなさんの普段されている中に本当の答えが、こども達とのやりとりの中に本当の答えがあると思っていますし、そう信じてきました。昨年ですね、何人かの先生方に授業を作って頂いて、子ども達のことはやっぱり先生が一番よくわかっていられるなど、実感いたしました。

今日はですね。私が知っていることをみなさんにお伝えするよりは、伝え合う力というこちらの小学校の目標についてみなさんと一緒に話し合っ、どんなふうに教室の中でこども達とそれを実現できるのかということディスカッションしたいと思います。

前半私の方でどんなふうに考えてきたかをお話させて頂いて、途中で高橋先生にバトンタッチをして具体的なこちらの学校にあったカリキュラムをみなさんでどんなふうに作られたらいいのかのヒント、こちらで作ったカリキュラムは単にお話を聞いてこういうこともできるかもという単なるサンプルです。この本当の中身はみなさんで作って頂きたいと思うのですが、総合的な学習の時間であるか道徳の時間でどんなふうにそれを具体的に作っていけるのかということで、今日の研究会の中心テーマとしたいと思います。よろしくお願いします。

こどもの話す様子
を実際に見守
る

15分か20分程度、私がどんなことを考えているかということについてお話し
したいと思います。この写真ですけれども、私と高橋さんは、いろんな国の小学校
に出かけて行って、小学校の低学年から高学年まで、一貫して対話教育、対話を通
して物事を考える力というもののプッシュしている小学校の調査を、調査といっても、
私は本当に出かけて言ってこちらの小学校と同じようにこどもの話す様子を実際に
見守るだけですけれども、数は多くないのですが10ヵ所ぐらいの小学校はいろん
な国、いろんな地域を見えています。



オーストラリア
のビューランダ
小学校

こちらなのですが、オーストラリアのビューランダ小学校です。こちらの研修会
で以前お見せしたことはあるのですけれども、見せただけでこれは全然伝えたこと
になっていないなと改めて反省したのですけれども、もう少しちゃんとわたしが見
聞きしたことを伝えたいと思います。

上に PHILOSOPHY 哲学と書いてあって、この紙はあとでくわしくお話しします。
こども達が、書いたものこれでセットなのです。ご存じの通りいくつかの国は少人
数20人ぐらいの学級の人数で、これでほぼ全員です。哲学の授業というのは、今
から哲学、哲学と言いますけど、あまりなんなのといろいろお考えなることもある
とは思いますが、それはどこかにしまっておかれていて、小学校でそういうふう
にされるとわりきってお話を聞いて頂ければと思います。週2回哲学の授業があり、
必ず授業の最後に子ども達は授業を受けたことで何を考えたのかを、哲学のノート
に書いていき、それとこういう画用紙に絵と言葉を書く。

これは写真では見えにくいのですが、こっちは分かち合う、こっちは分かち合わ
ないという言葉を書いてある。それは本人が書いているのですが、ここは何を分か

ち合うのか内容が書いてある。こっちはこの人の場合、空欄なので何も分ち合わないというすごく寛大な精神の持ち主なのですが、分ち合わないことがなにもないというそういうふうな結果を書いている。これはクラスで私達は何を分ち合うことができ、何を分ち合うことができないのかについて、ディスカッション、話し合った後にこども達が書いているというそういうものです。これはいったいぜんたいどのような意味があるのか後でお話したいと思います。こういう小学校を見聞きしてきました。

こちらの小学校は伝え合う力の育成をするという素晴らしいテーマを掲げられています。伝え合う力を英語風に言えば、コミュニケーションということだと思いますけれど、コミュニケーションというと多くの方が、やっぱり放送とか通信とか、ある情報を経路、インターネットとかテレビとか本とか経路を伝わって情報を伝えるというコミュニケーションを考えますけれど、私達の考えているコミュニケーションというのはそうではなくて、まさしくこの小学校がかかげられた「**伝え合う**」、の「**合う**」という所が**非常に大事だ**と思っています。そういう意味で伝え合う力をつけていくことはすばらしいことだと思います。

「合う」という所が非常に大事だ

今日のおはなし

「伝え合う力」とは？

どうして、何を、どのように？

考えるためのツール／スキルとは？

伝え合う力とは？

伝え合うこと（＝コミュニケーション）

→ 基本は言いたいこと言う、聴きたいことを聴く

自分が何を言いたいのか、何を聴きたいのか、は口に出してみなければわからない。

伝え損ないから学ぶことができる

→ 何度でもやり直せる場こそが大事

問う・質問することがコミュニケーションの原点

私が所属する大阪大学C S C D、略はコミュニケーション・デザインセンターというのですが、コミュニケーションという教育を大学でやらないといけないということに気がつきました。もう私も6年ぐらいおりますが、まさしく伝え合うという力を大学院生のために、私が教えるというよりはそういうスタイルを作ることや伝える力を養うためのスタイルを培うための時間を、機会をいろんな形で提供しています。今日は、この伝え合う力はとても大事だ。**伝え合う力**というのが、**基本的になんなの**ということをもう一回私なりに考えてみたいと思います。それを最初に話します。

伝え合う力というが、基本的になんなのでしょ

どうして、何を、どのように？

どうして伝えるの？

知りたい、知らせたいと思うから

何を伝えるの？

自分や相手が知らないこと、考えたこと、考えたいこと

どのように伝えるの？

自分や相手が何を言いたいかわいっしょに考える

ここでも、問う・質問することが基本！

どうして、なに
を、どのように

伝え合う力とはなんなのでしょう。タイトルに変なタイトルが入っていますが、「どうして、なにを、どのように」伝え合うということは、本当に大事だと思いますけれど、どうして伝え合うのか？いったいなんで私達は、人に何かを伝えたり、伝えられたりするのでしょうか。もっと大事なものは、いったい何を伝えるのか。伝えられるのか。それをいったいどのように伝えられるのか。つまりこれは、伝え合うということについてかかせないことだと思います。そこをちょっと考えてみたいと思います。

スキルというの
はうまい日本語
はない

するとどのようにということに密接に関係することなのです。伝えるということはどういうことかべつに、以心伝心ではなく、黙っていたら全部伝わるとかそういうことはありませんので、具体的にどんな手段とか、どんな道具とか。スキルというのはうまい日本語の訳はないのですが、やり方、実践的なやり方。

いろんな国で見たことのエッセンスをみなさんに御紹介したいと思います。この3つですね。

どうして？

〈知りたい、考えたい、言いたい〉は学びの基本

考える力と話し聴く力はいっしょに進む

考えること、なぜ、なに、どうしてを問うこと

言いたいことを
言う

まず、一つ目です。まず、わたしはコミュニケーションを日本語に訳す時に伝え合うということを一応選んでいます。ところがですね。意外とコミュニケーションとは何かということはそんなにはっきりしていなくて、人にとっていろいろかもしれない。辞書によって、意思疎通と書いてあるのです。意思疎通という言葉も難しく、疎通とは何ですか。意思とは何ですか。難しいですね。

まあ単純に、私が思うに、私はそれしかできないと思うのですが、言いたいことを言う。それがやっぱりコミュニケーションの伝え合うことの基本である。言いた

自分はこれが言
いたい 自分は
なにを知りたい

この2つの「た
い」がうまく重な
らない

コミュニケーションの難しい所

言いたいことが
言える場や環境
を作っていく
自分の言葉が届
いているのか
場づくり

身ぶり、手振り、
口

対面で

ちゃんと受け取
っている

基本的に口にだ
してみないと

他人に受け取っ
てもらって初め
てわかること

紙一重

いことを言いたいということが大事である。言うべきことを言うというのももちろんあるのですが、もちろん言うべくことをちゃんとすることも大事である。けれども、自分はこれが言いたい、逆に、伝えられる側からすると何を知らたいか。何を聞きたいか。ここも「たい」が入るのですが、自分は何を知りたいと思っているのか。

実は、この2つの「たい」がうまく重ならないと、両方の側にそれがないと聞き合うということにならない、伝え合うということにはならない。伝えることはできる。伝えるということは、簡単ですね。今、わたしが、なにになにと言ったら、私は伝えたいつもりですが、それがみなさんに伝わったかどうか全然わからない。

みなさんが知りたいと思ったことと、私が伝えたいと思ったことがうまくマッチしなければならない。それがコミュニケーションの難しい所だと思いますけれど。これはもう少し後でつっこんで考えてみたいと思います。

基本的に教室でできることは何かと言いますと、言いたいことが言える場や環境を作っていく。言いたいことを言うというのは、実は好き勝手に言っているということではなくて、本当に自分の言葉が届いているのかどうかとか、自分の言いたいことがわかってもらえたと思ったかどうか、思えたかどうか、やっぱりそういう場づくりですね。話しやすいだとか、あるいは、考えたことが受け取られたのかということを感じやすいような場づくりなのか、いろんな細かい所までふくまれてくると思います。

もう一つは、前に申し上げたことと密接に関係あるのですが、やっぱりですね。コミュニケーションの基本は、身ぶり、手振り、口だと思います。書くこととか、それ以外の様々の伝達手段、現代にはインターネットを含めて様々な情報操作によるコミュニケーション手段が活発化していますけど、やっぱり私の基本は、対面でしかも身ぶり、手振りを使って、考える時には考えこんで、今はちょっとどうなのかなという姿勢を見せる。それは、だまっているのではなくて、今質問されたこと、聞かれたことに対してふうん、それはどうなのでしょうね。というふうに考えるということのも一つのコミュニケーション。それはちゃんと受け取っているわけですから。そういう身ぶりがちゃんと交換できるような場所があって、しかも、とにかく一人で閉じこもって、「わかりました。それを後で持ち帰って考えます。」ではなくて、今その場でとりあえず、どう思ったかを言う。ということがすごく大事。これは本当に大切に大人、こども問わずに基本的に口にだしてみないと、自分が何を知らたいのかも、何を考えたかも、何がわからなかったかもわからないのです。

自分が、自分というのは本当に謎みたいな存在ですから、口に出すことで、人に聞いてもらうことで初めてそうだったのか。自分はそんなことを考えたかったのか。自分の悩みはここにあったのだということは、実は他人に受け取ってもらって初めてわかることなのです。だから、口に出して、とにかく他人とつながるということが、やっぱり伝え合うに欠かせないと思っています。

もう一つは、今の私もそうなのですが、常に伝えるということと伝えそこなう

常に間違い、聞き
そこない

すごくプラスな
こと

何度でのやり直
せる

豊かな意思疎通

情報

こども達と一緒
に教室の中にく
っていく

ということは紙一重ということです。多分区別できないですね。私のコミュニケーションということの根本的な考え方である。

コミュニケーションはうまくいくコミュニケーションとうまくいかないコミュニケーションとある。その二つがあるのではなくて、あるいは絶対正しいコミュニケーションと完全に間違っているコミュニケーションあるのではなくて、常に間違い、聞きそこないだと思うのです。でも、聞きそこないがあるから、え、もういっぺん言ってくださいとか。あ、ごめんなさい。ちょっと全然わかりませんでしたみたいなことが言えるからこそ、あ、そうかわからないのとか、自分はちゃんと言えてないのか、ということがわかって、それはすごくプラスなことなのですね。あ、そうか、自分これ大切なことを言い落としていた。これよくあると思うのですけれどもですから、何度でもやり直せるということが、実はコミュニケーションの大事なことのようです。実は、一般会議は最近プレゼンテーションブームですけど、こういうマルチメディア教材を使って、私は普段はあまりこういうのを使いません。見事なプレゼンをして、みなさんをだまらせて感動させるとみたいなのがよいコミュニケーション、プレゼンテーションと思われがちなのですけれども、実はそれは、コミュニケーションやプレゼンテーションのほんの一部でしかなくて、むしろへたくそでもできることがある。あるいはへたくその方があることがもっとできることがあるにではないかと思っています。ですから、何度でもやり直せるへたくそなコミュニケーションこそが、逆に豊かな意思疎通とか、伝え合うということにつながるのです。

本題の、どうして伝えるのか、何を伝えるのか、どのように伝えるのか、のヒントですね。また、あとでご質問を受けたいと思うのですけれども、ヒントだけ簡単にお話したいと思います。

情報というのは、伝えたい人の方にあるのではなくて、知りたい人の側にある。ちょっと逆説的ですけど、そうなのですね。警報があるかないか。あるいは、大雨がふるか危険であるかを知りたいのは、私であって、そういう私という受け手がいるから、初めて情報は意味を持つ。でないと、その辺にある看板と同じですね。看板は、それに人が目をむけなかったら、単なる物でしかない。情報が情報となるのは、私が看板を見た時なのです。

それから、知りたい、知らせたいという私の動機がすごく大事だと思います。こういうものをどのようにしてこども達と一緒に教室の中につくっていくのか。それはそんなに難しいことではないと思うのですけれども、こども達はこれをわたし達よりも非常に得意だと思っています。これまでの授業を見せて頂いて、大人より伝えたい、考えたい、話したいということが山ほどある。この点については、まったく心配はしておりません。

次は、何をなんですけれども、これは本当に伝える根本につながるのですが、何を伝えるのか、これは同じなのですね。さっきの私の警報の話と同じなのですけれども、やっぱり相手が知りたいと思っていることを伝えることが何よりも基本なので

相手の行動にうまく自分の言動が繋がっていく	す。これ以外の仕方では、伝えるということは生じない。それ以外の伝えるというのは、伝えるふりをしていていわゆる伝言ゲームですね。だれだれさんがなににないと言った。だれだれさんがなににないと言った。だれだれさんがなににないと言った。こればかりなのですね。これは、へたをすれば、聞き間違いで変なふうの意味もわからずに唱えているうちに、全然違うものに変質してしまうかもしれないし、もっとも伝えるべきものが欠落するかもしれない。危険だというのは簡単ですけど、この本当に伝えないといけないことが、実はその受け手がそれから何を受け取るかにもものすごく依存する。何をというのは本当に相手のことをよく知らないで、まったく逆のこと、相手にあぶないと言って、本当は止まってほしいのに、でもその人はあぶないと思って走り出して逆の結果を生む。ですから、コミュニケーションとは信号を発することではなくて、相手に、相手の行動にうまく自分の言動が繋がっていくことが大事なのですね。
じっくり一緒に考えていく	伝えるということは、相手のことをよく知り、しかも、相手が何をわからないかということを知っていくということですね。でも、そのためにはどうしたらいいかというと、自分や相手が何を知りたいと思っているのか、何を言いたいと思っているのか、じっくり一緒に考えていくところ大切です。コミュニケーションには、ある程度の伝え損ないは必ず含まれますので、それを解消するのに絶対に必要になる時間があると思います。これは、多分みなさんが、学校とはいわずに、ご家庭とか、いろんな所でわずかこれだけの問題がわかり合えるのになんでこんなに時間がかかったのだらうと思われることもあると思うのですが、それがコミュニケーションなのです。
覆い隠すのではなく、生きていく力	それでいいと思います。それを抜本的に解決する方法は多分ない。そういう問題を覆い隠すことはたくさんありますけど、学校の中では、そういうのを覆い隠すのではなく、そういう本当に子ども達が出会うであろう困難を本人達がどうやって乗り越えるかということが本当に生きていく力、子ども達が将来社会に出て、本当に必要な力だと思います。用意された問題を、用意された答えで答えて解決することももちろん一つの力だと思いますが、それだけで社会は成り立っていません。自分達
コミュニケーションのトラブル	が、しかも小学校というのは、大学とか中学とか将来の先に関係なく、すべての人間が必ず通る所ですから、困難に立ち向かっていく、コミュニケーションでのトラブルというものは、もっとも困難の一つだと思いますが、他人との人間関係など、そういう困難を乗り越えていくためにもやっぱりこういうことは大事だと思います。
知りたい、考えたい、言いたい	これも、さきほどお話したのですが、知りたい、考えたい、言いたいこの3つの「たい」というのは、学ぶということの基本だと思います。これをうまく私達がこども達から、あるいは相手からどう感じとるか、どんなふうに言葉を返していくのかということが、本当に教育の最大のおもしろさ、大変さだと思います。
教育の最大のおもしろさ、大変さ	あと私がよくやっている対話型のプログラムですが、こども達が楽しそうに話しているだけではないか、というご意見を聞きます。先ほども言いましたけれど、人

考えることをステップアップさせて 問うということ 言うのは難しい	間は話しながら、あるいは、書きながら、あるいはときにはだまって考えているわけですね。ですから、話し聞き、だまって聞く。また、話し聞き、だまって聞く。そういうことを繰り返すことが、考えることをステップアップさせて、進化させて、深めていくものだと思っております。 あとは、問うということですね。基本的には、自分も相手もそうですけれども、自分はどう思ったかとか、これ結構難しいのですね。今自分はどう思ったのだろうか、ということをはなかなか言うのは難しく、人の意見を聞いていると、その意見近いけれどもちょっと違うなというふうになってきて、ようやく自分の考えの輪郭がはっきりしてくるとかですね。
ぼくの考えとは違う	「じゃあ、あなたはさっきそう思ったの？」と聞いて、「うーん、それやっぱ、ぼくの考えとは違うのだね。」そんなやりとりといものが、どうしても考えるということにとっては、不可欠のように思われる。というのは抽象的なのですけれども、もう少しじゃ何をという所をひっかけてお話ししたいと思います。 これは、オーストラリアの小学校で実際なされている授業のプログラムの内容をご紹介しているのですけれども、日本だったら高校生ぐらいでも、先ほど道德のカリキュラムをもう一度確認させてもらいますけど、道德とか総合的な学習の時間で、共通するようなテーマですね。実際に考えたり、話し合ったりする題材に使われています。 こちらの小学校のプログラムに関連しているのですが、例えば、人権教育には自尊心というのがあるうたわれています。確かに自尊心といのは日本語としてあまり使わないし、セルフエスティームというもののなので、よこのものをたてにしたという感じなのではけれども、本当にセルフエスティームというのは大事ですね。
人々の中で大切にされた その人をうまく言わせないような背景 自分の価値が問われるような場所	自尊心とは作ったり作られたりするものではないですから。それはまあ、人々の、私達の中で大切にされたいということですね。簡単にいうと、人との対人関係ですね。対人関係で、例えば、ちょっとした言葉かけで、自分の本当に言いたいことに耳を傾けてもらえなかった。あるいは、本当に困っていると思っていた時に、困っていると言えなかった。本当にちょっとしたことで、自尊心って傷つきます。やっぱりそれは、コミュニケーション能力と表現能力と表裏一体で、そんなの本人が言わないから悪いのだと言われれば、そうなのではけれども、やっぱりそれは言わせないような、その人をうまく言わせないような、背景があったかもしれない。わからないではけれども、やっぱり、ある公の場ではけれども、人々の前で、自分の価値が問われるような場所で、自分というものをちゃんと受け取ってもらえたか。別に100%理解しなくてもいいし、みなさん、優れた人だけを優れたと評価するだけでじゃなくて、自尊心というものはすべての人が持っているものですから、ある教室の中で、誰かがある意見を言った、でもそれが意見としてちゃんと理解できるかどうかはともかくもして、例えば、意見言ってくれたありがとう、そういうことで、十分自尊心というものは守られると思いますので、そういうふうにして道德の内容につながってくると思います。そういうテーマとしての自尊心とか、尊重す

本人が自信を持
てる 教室でで
きること

おびえずに私は
あなたと違う
教育の役割

る、尊敬する、自分と何が違う、人と自分は何が同じで、何が違うのかとかそういうことをテーマにして、具体的に授業される。これは、こちらの道德の授業と同じで教材があるのですね。オーストラリアの場合は、絵本をよく使うのですけども、こちらも絵本とか使われるのですけども、教材はあくまでもこういうことを考えるための素材であって、目標は人を思いやるということがいったいどういうことなのかということです。道德教育で一番大事なものは、話している内容とやっていることが必ず一致しないといけないということです。例えば、せっかく意見を言っているのに、それはおかしいと言われたら、それ自体が尊重されてないですね。尊重したとは思えない。ちゃんと教室という公の場所で、自分が一人の人間として意見を言ったこと、あるいは質問したことに対して、うまく受け止められたかどうかはわからないけれども、それが言えたということを本人が自信を持てるということ、それが何よりも道德ということの役割であって、そのことが教室でできることが大切です。

ですから、発言をちゃんと尊重し、もちろん尊重するというのは、別にそれは、私は賛成しないとか、反対するとか言ってもいいわけで、こども達は堂々と言いますので、ちゃんとおびえずに私とあなたは違う意見を持っているということを言えればいい。違う意見を持つ同士が、ちゃんと発言し合うということができれば、それはそれで教育の役割を担っていると思います。

何を考えるの？

自己、じぶん、アイデンティティ、わたしはだれ？

所属「わたしは・・・の一員です」

家族、仲間、近所の人、集団、地域

文化 人を思いやること 自分や他人を尊重すること

同じことと違うこと 責任 善いことと悪いこと

持続可能性（環境に関すること）

1・2・3年生で話し合われるテーマ

（ビューランダ小学校の例）

高学年になったら何を？

自分 アイデンティティ、私は誰？ 文化 からだ

尊重、尊敬すること 人を思いやること 責任 価値

協力すること 勇気 善悪、倫理 美しいってどんなこと？

変わること 働くということ 歴史 時間について

違い 何のために？（目的） 知ってどういうこと？（知識）

8

文化 価値 歴史 善悪 美しい よりいい意味で抽象的な概念化

美しいとい何かを感じる

共通するのは、総合的な学習の時間と道徳の教科外の時間となります。オーストラリアの小学校では、1. 2. 3年生から始められて、高学年、4. 5年生になったら、ほとんど同じなのですけれども、これ日本語に私がしているので、あまり違いはわからないのですけれども、より概念化されているのですが、あの文化なのですね。いきなり使いませんが小学生だったら、ただ高学年になったら、文化ってなんだろう。文化という言葉を使っていいですし、価値という言葉を使ってもいいですし、歴史とか、善悪とか、そういう、もう少し善悪って、美しいってどんなのだろう。ちょっと抽象的な、低学年に比べたら、よりいい意味で抽象的な概念化されたものをあつかっていくのがオーストラリアの場合でされている。まあ、これは・・・先生方が作られているので、こちらの学校でもみなさん方でこんなたくさんでなくていいので、5つでもいいと思いますので、学年ごとにこれをやっていきましょう。あるいは、学年をこえて、こういうことは、例えば美しいという何かを感じるということを何年間続けてやるとか、そういのをみなさんで作って頂ければ、全然まねする必要はありませんので、小学校の先生方が、御自分で開発されたものなので、これを参考にして作られたらと思います。

あとは手短に、ツールということを御紹介したいと思います。あのこれまでの話はまだまだぼんやりとした形になっていますけれども、今私が話してきたことは本当に具体的な共通な、いろんな細かい工夫で実現できるのではないかと思います。

考えるためのツール編

円になる（先生も生徒も）

→話しやすさ、対等さ、関心の共有

隣り通して意見を言い合う

→一対一が基本、相手と私を意識する

書く→読み上げる→見せ合う

→書くことで自分の考えを整理できる

道具を使う

→絵を描く、モノを使う

読む（寓話）

対比するシチュエーション
円の中の一人

これは、ほんの一例なのですけれども、なかなかできなかつたりするのですけれども、子ども達が円になるのです。一番大事な所は、ちょっと写真をみせますけれども、こちらのこの方が先生なのですね。あの輪の中に先生がいる。先ほど書きましたように、円になります。必ずしも円にならないといけないとは思わないのですが、円になる時は、みなさんの共通の関心を持つ。つまり、今の私の状況ですね。みなさんと私みたいな対比するというシチュエーションではなくて、これだと私は常に発言しないといけないというプレッシャーを与えられますね。そうじゃなくて、円の中の一人だったら、どこも中心がないのですから、どこも中心になります。対

関心の共有

円になることは
コミュニケーションの基本

隣と意見交換

コミュニケーションの輪の中

備忘録

等だとか、共有ということをもそんなに口で説明しなくてもそれができてしまう。関心の共有ですね。今、真中に紙がおかれていますけど、あれは、実は誰かが発言したことをメモにとって、真中に置いておくのです。忘れないように置いておく。そんなふうに関心の共有、円になるということはコミュニケーションの基本と思っています。

もう一つですね、これは、ツールといえるかどうか分からないのですが、円になるばかりではなく、実際オーストラリアでは、例えば、隣同士で1分間ぐらいなのなのですが、ちょっと意見交換をするのです。円になった場合は、なんかこう全員が顔をみられるという不思議な状態になりますので、それはそれで緊張してしまう場合があるので、場合によっては、一瞬ですね、隣と話をします。これはこの小学校の先生方も授業でされますけれども、ちょっと隣と意見交換するというのは意外に使えるのです。急に場が活発化します。

後、書くということを入れてもいいと思います。これは、ただし、書くということがけっして個人的なものに持ち帰らせなくて、書くということは、あの5分ぐらいかけてちょっと考えて、考えをまとめるために書く。しかし、コミュニケーションの大きな輪の中に、書くということを入れる、書く、読み上げる、みつめる、意見を聞くということが、常にセットになっていることが、私は望ましいと思います。これが難しいし、大事な所ですね。伝え合うということは、一方向にすすんでいくのではなくて、それがちゃんと円になってもとにかえってこないといけない。ですから、何かを言う前に、自分は何を考えたのだろう、じゃそれを思い切って発言してみようで今度は発言されたものを聞きながら、質問をし、そういうふうにして、まわっていく。書くということも、しかもその書き方を、先ほどの絵のようにこういう紙に書いてみんなの目の前に置くと、自分が発言したことが前に張り出されたりするのも、もしかしたら、ちょっと気持ち悪いかもしれませんがね。まあ、備忘録という形で、目の前においてあるのです。書くということも、コミュニケーションを活発化するものであると思います。



フラフープを使って

最初に方にいいましたように、こういう物を道具として使う。こういう物を使って、これ本物と本物でない物と2年生が分けてやっています。本物って何ということを考えてほしいのですけれども、それは2年生には難しいので、「本物って何？」と尋ねて、本物である物と本物でない物を、**フラフープを使って**分けて置きます。まだ小学校低学年で言葉を学びかけなので、フラフープの中においていく。「なんで置いたの？」と尋ねるのが大事なのですね。「なんで置いたの？」と聞いたら、「こうだから。」と自分の考えを話します。いろいろ聞いているうちにやっぱり「これは、こっちな。」と動かすのですね。

これは、私も教室で大学生相手に使うのですけれども、すごくよくうまくいく。小学生だったら物でやったらおもしろいですし、まあ、大人だったら、紙に書いて、この間これ大学でやってのですが、本物であるか、本物でないか。100万円と書きますね。面白かったですよ。100万円というのは、大学でやった時は、リアルであるか、リアルでないか。100万円はリアルでない。そういうのをやってみたのですが、そういうちょっとした情報だけで、すごく議論がひきしまった。

このゲームをした後に、これもゲーム感覚でやればいいのですね。自分が本物と思うものを持ってきてください。本物と思わないものを持ってきてください。その意見を聞き合うのですね。みんなの意見を聞いた後で、最終的に自分が分かち合う、分かち合わない、この二つのもので、最終的に自分が選んだものを書く。言葉であってもいいし、絵であってもいい。このように廊下の壁にはりだしてある。

こういうふうにして、小学校低学年であっても、高学年であっても、こういうツールを使って、実は、こういう考えるという授業がやっていけるかなと思うのです。以上です。

あと、これはまあ最後、スキル。こういう授業が、こども達のどういう力を、育てているかということです。

考えるスキル（技）の例

- | | |
|-------------------|---------------|
| ・ 聞く／理由をいう／問う／述べる | ・ 例をあげる |
| ・ 他人の意見について考える | ・ 振り返る |
| ・ 問いをまとめる | ・ 何、なぜを問う |
| ・ はい／いいえを問う | ・ 説明する |
| ・ 違ったみかたをする | ・ 基準をあげる |
| ・ 定義する | ・ 反例をあげる |
| ・ べつの考え方を考える | ・ 区別する |
| ・ 喩える（類比） | ・ 類似と相違 |
| ・ 前提を探す | ・ 誤った推論を見つける |
| ・ その喩えは本当？ | ・ 関連づける |
| ・ 仮説を立てる | ・ 議論の進み方を評価する |
| ・ 推理する | |

質問するという
のは、何回もやり
なおさないとい
えない。

繰り返しトレー
ニング
例をあげる。説
得力がある。

オーストラリアの先生方にもらったものを私なりに工夫したものですけれども、人の話を聞くとか、質問するとかというのは実はスキルなのです。それは多分なれていかないとできない。昨年度、先生がされた「質問する」という授業を見られた方は、おられるかもしれないですけれども、**質問するというのは、何回もやりなおさないといけない。**それは、ごく普通のことです。実は質問することはかなり高度な、よい質問を的確にするというのは、多分大学院生になってもなかなかできない非常に高度なテクニックですね。ということは、逆に、最初はどううまくいなくてもいいから、まずは、とにかく質問にならなくてもいいから、とりあえず、ぶつけてそれを質問にしていくことが大切です。そういう**質問するというスキルを本当に小さい時から、大きくなるまで、繰り返しトレーニング**することが、実は本当に単純なことですけれども**重要**です。同じことが、**例をあげるとかにも言えます。的確な例をさっとあげたら、いい例をあげたら、それで話が解決するぐらいの例**というのは**説得力**がある。実際のあったことですから。

具体的な本当に1この教材の中で、今日は、道徳の時間にこの教材を使って、教科学習でも道徳でも総合的な学習の時間でもどれでも使えると思いますけど、その中で今日はここそこに焦点をあてようと、一つか二つを選ばれて、説明するも今回は重視してみようということを、そういうふうにしてその日の学習の目標をかかげて、本人達がそれをできたかどうかを後で、検証されるといいと思いますし、そんなふうにして毎回の授業で今回はこのスキルに焦点をあててやりましたということを使ってもらえたらいいと思っています。

ということで、少しのびてしまいましたけど、何を、どうして、どのように大枠は私の方で話させてもらいました。ここで、高橋先生にバトンタッチをして具体的に総合学習のこの学校でされていることに関連つけてこんなことが考えられるかなということを高橋さんに考えてもらいます。これはたたき台ですので、是非したいではなくて、みなさんこんなふうにと考えたら楽しいのではないかとということを高橋さんの方から提案して頂きたいと思っています。よろしくお願いします。

「話す・聞く」で大切なこと

「自分の考え」は一人で浮かばない
→他人の異なる意見を聴くことから始まる
格式張った「スピーチ」よりも、よい聴き手の前で
ゆったりと話すこと
本当に考えたいことをみつけるための時間
まずは、質問する・答える、から
グループ作業を放置しない
形式に囚われないこと「パネルディスカッション」や
「ディベート」をその場の工夫で柔軟に使う

高橋先生の講話

大阪大学コミュニケーション・デザインセンターの招聘教員をしております高橋です。私も本間先生と同じで、小学生もそうですし、高校生もそうですし、大学生もそうなのですが、何かを私が教えるというよりも、生徒達と一緒に考えながら、一緒に学んでいくというスタイルが好きで、そういうことをしています。教えるというか、人と話して考えるのが好きで、今回は本間さんの提案に従って、例えば、総合学習ですが、5年生はこれ、3年生は環境テーマとか、4年生は働くとかがテーマとしてあるので、それにそくしてどんなことができるのだろうか？ということをもし、自分だったらどんな授業をやるかなと考えながら作ってみました。

問いかけること、
感じること、コミ
ュニケーション
すること、協働
まず、感じること
がすごく重要
みんなに伝えて
いく

大目標はともに考えるということ、あるいは伝え合うということ同じですが、一緒に考える、一緒に伝え合うということを目指しています。後どういうポイントがあるかなという4つあるのですが、これは本間さんと金澤先生のほうから提案を頂いて、問いかけること、感じること、コミュニケーションすること、協働、協働って一緒に何かをすることや、相手のことを思いやること4つのポイントを重視して、どういう授業が組み立てられるのかということを作ってみました。本間先生がおっしゃるように伝えたいとか、知りたいがでてくる前に、まず、感じるということがすごく重要かなと思ったので、実際この学校でもされていると思うのですが、浜に出かけて、自然や風景についていろんなことを感じる、自分がどんなことを感じたかなということをまずみんなに伝えていくことを重要だと考えます。例えば、理科の教科書にこれとこれがあるからそれについて知ってほしいって先生方思われるかもしれないですが、もうちょっと子どもが香櫨園浜で何を感じたかという所に、焦点をあててもおもしろい授業ができるのではないかなと思いました。実際に今年の3年生が香櫨園浜に一回行かれて、何か感想のシートを見せてもらったのです。そしたら、子ども達はいろんなことを感じていて、私が印象に残ったのは、子ども達が香櫨園浜にいろんなものが流れてきていることに着目をしていて、例えば、海の魚の死体とか、後ヒトデみたいなものとかが流れてきたりしていたりして、この流れてきたものが不思議だなと書いている人がたくさんいました。それはたぶん不思議だなとか、知りたいという「たい」の所がでてきているのだと思うのですが、そういうポイントから、例えば、香櫨園浜にはいろんなものが流れてくるのは、どうして何だろうというのをみんなで一緒に問いにして考えてみるというのかなというふうに思いました。

知りたいという
「たい」の所
みんなで一緒に
問いにして考え
てみる

そういう問いをもし、みんなで一緒にたてることができたなら、グループでたてることができたなら、それについて流れてくるとはどういうことか、それは海だからどこから来たのか、どうして海から来たものがまた海にかえっていかないのはどうしてかということをみんなが考えて、一緒に考え合う、あるいは、発見したことを聞き合う、コミュニケーションとして大事なのではないかと思います。最終的には、昨年の先生もされていたのですが、自分達が考えきたこと、感じたことを伝え

みんなが考えて
みんなと共有す

る	るという、みんなと共有するということはすごく大事なことです。
他の人に伝える	もうひとつ共にという所ですけれども、これはクラスの中で共にというのでことはなくて、クラスの外への関心というものの、例えば、環境ということだったら、地域とか、自分達が住んでいる所への関心というのもでてきたらいいかなというふうに思います。その延長線上で、地域の人に子ども達が香櫨園浜について質問をしたり、香櫨園浜のボラティアの方から教えてもらったりということもあると思うので
クラスの外への関心	すけれども、子ども達が香櫨園浜についてどんなことを考えているのかということ
子ども達の考え	を地域の人に伝えたりするような時間というのがあったらいいのではないかなと思います。例えば、香櫨園浜がこんなふうになったらいいなという子ども達の考えた
られたことを伝えられる時間	ことを伝えられる時間を設けたらいいのではないかなというふうに、この問いかける、感じる、コミュニケーションをする、協働をするという4つのポイントだとそんなふうに授業が組み立てることができるのではないかなと思っているのです。
向き合う時間	4年生は、働くこととか夢っていうかというのがテーマと伺ったので、これに関しても感じるってことが大切かなと思います。自分が何を好きなのかよく感じてみるとか、どういうふうになりたいかを想像してみるということはすごく重要なことで、自分が感じていること、したいことについて向き合う時間とか、あるいは、他の人の好きなこととか、したいこととかを聴き合う時間とか、この延長線上として、
聴き合う時間	ここでもクラスの外に関心を持つということで、この地域でいろんな仕事をしている大人の人に、子ども達がこういう仕事について知りたいということを、例えば、インタビューしてみるというような時間が持てたらいいのではないかと思います。
楽しい経験	5年生は、美術鑑賞というのを総合学習で、力を入れてされているのですが、私は美術館で対話をするというのをやっけていまして、実はさっきも美術館の人と話していました。美術を見ながら自分達も描くというのもすごく楽しいのですが、鑑賞した時に、感じたことを、美術をみたことを感じたことを言葉にして話し合うということは、すごく子ども達にとって楽しい経験だし、いろんなことが学べる経験だと思うので、この美術鑑賞に関しても、描くだけではなくて、伝え合うということが大事じゃないかなというふうに思っています。
自分と向かい合う、絵と向かい合う中で見つけていく	美術の場合は、感じるということがすごく大事なので、子ども達一人一人が作品の前でじっくりその絵を感じる、例えば、美術の教育だと美術館の人と話されていたのですが、誰が描いた作品だとか、どういうふうに描いたのかという知識の方に、割と大人の目もむいてしまいがちなのですけれども、それよりも大切なのは、絵をどのように自分が感じるかということ、自分と向かい合う、絵と向かい合う中で見つけていくということだと思います。まず、じっくり見て感じて、感じたことを言葉にして、他の人に伝えるとか、何でこの絵ってこんなふうに描かれたのかなっていう疑問をみんなに発してみるとか、それをヒントにしてみんなで考えることというのもできるかもしれません。あるいは、他の人の発見を聞きながら、また絵に向かい合って、また、違う発見がある。絵にかえっていくという経験というのも楽しいかもしれないというふうに思いました。絵について自分達で話し合う
違う発見	

外に疑問や自分
達が考えたこと
を伝えていく
英語を通じて異
なる文化

言葉の意味はと
いうのは文化に
よって違う

英語にはどうし
て敬語がない
の？

他の文化の人た
ちに英語を通じ
て、質問をする

関係を広げて

自分に向き合っ
て よく考える

という経験は、なかなか持てる経験ではないのですが、できたら楽しいかなということと、美術館には学芸員さんという方がいるので、自分達が話し合ったことで、この絵についてこんなことが不思議に思えたのですが、ここは分からなかったのですが教えてくださいというように、学芸員さんに子ども達が質問をするという形で、外に疑問や自分達が考えたことを伝えていくということもできるのではないかなと思います。

最後の6年生の所は英語と異文化というのが、キーワードであると伺ったので、英語を学ぶというよりも、英語を通じて異なる文化についての子ども達の理解というのが、あるいは、疑問というのが及んでいったら楽しい授業になるのではないかなというふうに考えました。例えば、英語を学びながら、こんな言葉がなんであるのかなみたいなことに子ども達が気づいたりしたら、おもしろいじゃないかなと思います。例にだしたのは、アイムソーリーってどんな時に使うのかな？という疑問なのですが、アイムソーリーってという言葉は、日本語のごめんなさいと、実は同じ場面で使われることもあるのですが、同じ場面で使われないこともあります。言葉の意味というのは文化によって違うので、一対一対応を本当はしていないのです。日本語である単語でも、英語にない単語はあったりして、そういう所に着目すると、単に英語を学ぶということじゃなくて、英語を通じて文化を知っていくということができないのではないかなというふうに思ったりします。これは本当かどうかわかりませんが、例えば、英語にはどうして敬語がないの？とか、先生のことも、名前でトムと呼んだりするのはどうしてなの？とか、英語は話され方に着目すると、異文化、英語を通じて異文化にふれていくとか、文化って何だろうということを知っていくということができたらおもしろいのではないかなと思います。例えば、先生のことを名前で金澤先生はしょうじ先生だから、しょうじって言って、しょうじでしたっけ？（まさじです。笑い）まさじと呼べるかどうか？でも、先生のことをまさじなんて呼ぶのはおかしいと思う子もいると思うので、それについて話してみるのもおもしろいかなと思います。それプラスアルファやっぱり自分達の文化のことを、他の文化の人たちに英語を通じて、例えば、質問をする、関わっていくというのはおもしろいと思うのですが。「先生のことをなんでトムと名前で呼んだりするのですか。」というのを外国の人に質問をしてみる、外国の先生に質問をしてみるとかというのはおもしろいかもしれません。文化というのは、英語だけではないので、英語ってことから他の文化もあるよね、というふうに関係を広げて、例えば、韓国ではどうなのだろうかとかもっと違う国ではどうなのだろうかみたいなことを考えていくというのもおもしろいのかと思います。

最後は、道德教育、先ほど本間さんも話されていた道德の教育、人権の教育というところです。これに関しても、自分がどう感じているのかとか、どうするのが正しいと思うかということを実際に自分に向き合って、まず子ども達がよく考えることってというのが大事かなというふうに思います。

私は去年5年生のクラスで授業をさせて頂いたのですが、質問をするということ

自分に何度もかえって

他の人がどう感じるかということ
とを向き合い

自尊という問題
私の考えだとし
っかり主張した

自分は違う考え
をもっているよ

逆に質問をし

を主眼おいた授業をさせて頂きました。この時のテーマが「ぼくたちみんな平等」というテーマで、子ども達の話聞いて一緒に考えるというのをやらしてもらったのですが、この時にも、子ども達は自分が何を平等かと思うかということ、自分に何度もかえっていろいろ感じながら考えを話してくれました。それはすごく私にとってはおもしろいという以上に、非常に感動する経験でした。自分がどう感じているのか、平等ってどういうふうなものだろうか、どう感じるということを自分と他の人がどう感じるのかということ向き合いながら、話し合っ意見を出していただくことで、他の人が言ったことに関心を持って質問をしていました。後、他の人の意見を聞きながら質問をして、みんなの前で自分の考えを話して、例えば、平等っていうテーマだと色々な子ども達の間でも色々な考えが分かれて、人間だから平等という人もいましたし、平等とは権利だというふうに、少し難しい言葉なのですけども5年生で権利という言葉を使う人もいました。

私が一番印象に残っているのは、自分の家庭があまり豊かではないという生徒がいて、貧しい人とお金持ちの人が世の中にはいて、平等ではないという意見を選んだ子のことでした。この授業では、みんなに質問をされるのです。担任の先生と私が心配をしたのは、この子は自分の家庭が豊かでないということについてみんなの前で言うってことは、彼女を傷つけることになりはしないかということでした。彼女はそれを言いたいと言ったのです。他の子たちは、お金持ちと貧しい人がいても努力をすれば、みんなお金持ちになれると言った子どもがいて、彼女はそれを違うと自分はそれを絶対違うって言うふうに言いたいと言って、担任の先生も何度も確認をしてくださったのですが、彼女は答えると言いました。みんなの前で、まさしくそれは先ほどの自尊という問題だと思うのですが、自分は世の中には、お金持ちの人と貧しい人がいてそれは簡単なことでは変わらない、それは私の考えだということをしっかり主張しました。彼女の中で、それは何なのでしょうね、自分の事情とか、自分の悩みということではなくて、自分の意見としてそれを言うということができたことが、すごいなと思ったし、それを聞いている人も、何と言いましょうか、半分ぐらいの人が彼女の家を知っているかもしれないし、想像もできたかもしれないけど、その人の意見としてきちんと聞いていたので、そのコミュニケーションができるようになったのはすごいなというふうに強く印象に残っています。プラスアルファ、これも先ほど、本間さんが言ってくれたことですが、みんな彼女に同情するって言うことではなくて、でもお金持ちと貧しい人がいても平等というのは権利じゃないかというふうに子どもに質問をした人がいました。それは確かに彼女の考えもあるけれども、自分は違う考えをもっているよということを考え、こういう考えもあるではないかと真剣に伝えようとした別の人やいて、その質問もすごくよかったなと私は思いました。その彼女も権利という言葉は自分ではわからなかったもので、「それはなに、権利という言葉をもっと知りたい。」ということ言って、「権利ってなんですか。」という質問を、平等というのは権利ではないかと言った友達に「権利ということにもっと教えてほしい。」と逆に質問をしていま

その二人のやりとり
クラスの人の発見

した。その場面は印象に残っているのですが、そういうふうに自分達の考えと
いうものを聞き合いながら、貧しい人と豊かな人の差とか、平等ってどういうこと
かなっていうことに自分達で考えて問題を例えば、新しい問題をその二人のやりと
りでそのクラスの人が発見しました。権利って何なのだろうかということを新たに
発見しました。そういうふうになんて新しいテーマを話し合いの中でみつけていくとい
うことも、その授業では子ども達はしていたし、そういうことができたなら、道徳教育
に関して有意義な時間になるのではないかなと思いました。先ほどの4つのポイ
ントというものは、道徳教育にも人権教育にも有効なのではないかと思って、表と
いうものを作ってみました。

本間先生の講話

大切な自分
お互いの個性を
気づく

われわれの話が結局長くなってしまいました突拍子のない話をした感じがします
けど、こういうものを毎回しなくてもいいと思いますので、教材も言ってみればど
んなものも教材になりますので、教材がこうだからと思われなくて、高橋さんが言
われた質問法などと組みわせてやってみる。

大切な自分というテーマがあって、主題は自分を肯定的にとらえてお互いの個性
を気づく活動を通して人間関係の完成化をはかるというのが主題ですから、これは
すごくいい目標だと思います。その時にどういうツール、どういうスキルが問題に
なってくるのか、授業はどう具体的に組み立てるのか、どういう教材がいいのかと
いうことにその教材についてどういう作業を子ども達にさすのか、焦点をあてるの
かということですね。具体的にみなさんが普段されていることに、それほどそれを
かえることなくでもできることでありますので、同意していただけるのではないか
ということが、私の御提案であります。